十二、鮫に追われた若者と観音様

　今から七百年以上も昔の鎌倉時代、幕府では北条時頼が執権をしていた頃のことです。
　品川沖を矢のように走る漁船がありました。船に乗った七人の若者たちは、何におびえているのか、声も出せず、死に物狂いで櫓をこいでいます。
　それもそのはずです。この観音丸という漁船は、今まで見たこともない大鮫に追いかけられていたのです。見るからに恐ろしい大鮫は、船の周りをうずを巻きながら泳ぎまわり船に体当たりしてきます。
「手をゆるめるな？油断をすると船をひっくり返されるぞ！」
　と、年長の若者は、仲間を励ましました。
「もうだめだ！手が疲れて・・・・・」
　誰かが言いました・しかし、まだ岸まではかなりの距離があります。このままだと、全員が大鮫のえじきになってしまうので、手を休めることはできません。
「助かる工夫はないのか？」
　年長の若者が、声をしぼりだしましたが、みんなに明暗などあろうはずはありません。
「では仕方がない、一人が海に飛び込んで犠牲になる・・・・・その間に逃げる。」
その言葉は、悲痛でとぎれとぎれです。
「誰がなるんだ！」
やっと、みんなが口を開きました。
「鉢巻きを海に投げ、一番早く沈んだ者にしよう。どうだ・・・・・」
「よし、よかろう！」
全員が賛成しました。
「おれが号令をかける。用意しろ！」
　七人の若者は、鉢巻きを取り一、二、三の合図で、いっせいに鉢巻きを海に投げました。何ということでしょう。一番早く沈んだのは、言いだした年長の若者でしかもこの観音丸の持ち主の息子の鉢巻きではありませんか・・・・・
「よし、約束だ。おれが飛び込む。みんなは、その間に逃げるんだ。」
意を決した若者は、着物を脱ぎ、腹帯一つになりました。
「身代わりになってくれて・・・・・申し訳ない。」
「ありがとう。」
　仲間の若者たちは、手を合わせ、死の別れをしました。船のとも（船尾）に立った年長の若者は、仲間に向かって手を合わせて、別れの言葉を告げると、海の方に向き、観音経を高らかに唱え、大鮫のいる海に飛び込みました。すると、大鮫は、若者を追って海中に沈んでいきました。残った六人は、急いで櫓をこいで、岸の方へ向かいました。
ところがどうでしょう・・・・・
「あっあれは？」
信じられないことが起こりました。年長の若者が、ぽっかりと海面に浮かんできました。
「助かった！」
六人の若者が、歓声を上げました。
「これにつかまれ！」
船の中から縄が投げられ、年長の若者が、その縄につかまると。みんなで船に引き上げました。
「命が助かった・・・・・」
「奇跡だ！よかった！」
　七人の若者は、抱き合って喜びました。大鮫は、二度と海面に姿を現しませんでした。
　ずぶぬれの年長の若者は、我に返って腹に手をあて、「あっ」と、声をあげました。
「観音像が無い・・・・・」
　年長の若者は、ひっしに回りを探しましたが見つかりません。きっと、海に飛び込んだ時に腹帯がゆるんで、白布に包んであった観音像が、海底に沈んでしまったのでしょう。若者たちは、やっとのことで、品川の岸辺にたどり着くことができました。
　この話は、すぐに猟師町に伝わり、いつまでも人々の話題になったそうです。命拾いをした年長の若者の一家は、観音様の熱心な信者で、船の名前も「観音丸」と名づけ、若者は、いつも観音像を肌身離さず身につけていたのだそうです。

　それから何年か経ったある日、品川沖の漁師の網に、小舟くらいもある大きな鮫がかかり、漁師たちが、あばれる鮫を必死になってしとめ、岸へ引き上げ、六、七人で鮫を解体したところ、腹を切っていた一人の包丁の先に、カチリと当たったものがありました。何だろうと、手を入れて取り出してみると、観音様の像でした。
「おや！観音様だ。」
「不思議なこともあるものだ。どうして鮫の腹から？」
やがてこの話が町中に伝わりました。それは、数年前、観音様の像を腹に巻いて飛び込んだ若者の“観音像”だったのです。
「観音様が身代わりになって下さったのか・・・・・」
と、その若者は、改めて観音様のありがたさを感じたそうです。
　建長三年（一二五一）、この話を鎌倉幕府に報告したところ、執権の北条時頼は、「天下安全のめでたい前ぶれであろう・・・・・」と、その海辺近くにお堂を建てて、観世音菩薩像を安置しました。そして、寺の名を観音の住んでいられる、清らかな所という意味の「補陀洛山」とし、寺の名を四海が安全であるようにと、「海晏寺」と名付けました。
  このことがあって、この辺りの土地の名を、鮫洲と呼ぶようになったのだそうです。
　海海晏寺（南品川五丁目十六番二十二号）は、現在は第一京浜国道に面した場所にありますが、江戸時代には参道が旧東海道に面していて“紅葉”の名所としてとても有名な寺でした。

海晏寺のもみじ

撮影日：1971年(昭和46年)10月20日

（「しながわweb写真館」より）

 